



TITLE:

書評・長坂格著『国境を越えるフィリピン村人の民族誌：トランスナショナリズムの人類学』

AUTHOR(S):

関, 恒樹

CITATION:

関, 恒樹. 書評・長坂格著『国境を越えるフィリピン村人の民族誌：トランスナショナリズムの人類学』. コンタクト・ゾーン 2011, 4: 245-250

ISSUE DATE:

2011-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177230>

RIGHT:

長坂格著

『国境を越えるフィリピン村人の民族誌』

——トランスナショナリズムの人類学』

明石書店，2009年，8,400円，450頁

関 恒 樹

本書は、フィリピンのイロコス地方からイタリアへの移住を事例として、国際移住の展開に伴うトランスナショナルな社会的場の形成・持続・変化を、民族誌的に記述・分析することを目的としたものである。人口の約10%が海外に居住するフィリピンでは、海外からの送金収入によって活性化する人々の旺盛な消費活動に応えるべく、巨大なショッピングモールが乱立し、海外在住フィリピン人の投資向けに豪華な高層住宅が雨後の筍のように立ち並ぶ。このように今日のフィリピン社会は、まさにトランスナショナルな社会的場に組み込まれており、首都から数百キロメートル離れた村落の生活もトランスナショナルなネットワークとの絡み合いの中で維持されている。そしてこのような状況はフィリピンのみでなく、今日の世界の各地に共通して観察されるものであろう。本書は、このようにグローバル化し、トランスナショナルな社会的場に組み込まれた地域社会の動態を、精緻な民族誌によって描き出すことにより、国際移住やトランスナショナリズム研究に対して人類学的アプローチが持つ可能性を明確に指し示した労作である。

本書は、フィリピン、ルソン島北西部のイロコス地方最北端の州であるイロコス・ノルテ州に位置するP町S村で1993年以来2001年まで断続的に約20ヶ月間継続されたフィールドワークのほかに、S村出身者が居住するイタリアのローマ市で1998年と2001年に合計1ヶ月、さらにフィリピンのマニラ首都圏で2001年以降合計約2ヶ月の間行われたフィールドワークによって得られた資料に基づいている。以下では、まず本書の内容を要約し、その上で本書の議論が持つ意義、そして評者が抱いた若干の疑問点を指摘したい。

本書は序論と結論のほかに7つの章によって構成されている。まず序論「トランスナショナリズムを文脈化する」では、本書の目的が「出身地社会、移住先双方におけるフィールドワークで得られた資料に基づき、移住者と非移住者の生活世界に影響を与えるマクロレベルの構造的な文脈と、出身地社会の歴史的・社会的・文化的な文脈を踏まえて、トランスナショナルな社会的場の記述・分析を行うこと」であると述べられる。そこには、これまでの国際移住研究では十分に議論されることのなかった、出身階層や出身地域の違いによるフィリピン人移住者内部の多様性や、出身地社会の生活経験の多様性によって生じる移住経験の個別性への配慮が必要であるという著者の基本的問題意識がある。

第Ⅰ章「トランスナショナリズム研究からの視点」では、これまでの主要な移住研究の理論的アプローチを概観した上で、本書の議論が依拠するトランスナショナリズム論の分析枠組みが持つ可能性が述べられる。まず、移住を個人の合理的な意思決定の集積として捉える均衡論と、マクロな歴史的・政治経済的構造要因から移住を説明する史的構造論という2つの対立するアプローチに対して、それらを統合するアプローチとして世帯維持戦略アプローチと移住システム・アプローチが検討される。そして、それらのアプローチが単に移住現象の発生と持続を説明するための要因の分析に止まっているのに対し、トランスナショナリズム研究の射程は、出身地と移住先の間に形成されるトランスナショナルな社会的場が移住者にとって持つ意味や、そのような場における移住者たちの日常的な社会的実践の分析を可能にすることが論じられる。

第Ⅱ章「村落社会の概観」では、本書の対象となる人々の出身地社会が、村、家族・親族関係、移住史という側面に注目しつつ概観される。まず本書の対象となる移住者たちが「バランガイ」あるいは「バリオ」と呼ばれる村出身の人々であり、そのような村は町の中心街区である「ボブラシオン」とは社会経済的に差異化された空間であることが指摘される。そして、そのような村／町という対照的社会空間に内在する差異性が、移住者たちのアイデンティティ形成に大きく影響を及ぼしていることが論じられる。次に、調査地域の家族・親族関係の重要な範疇として、「自己を中心として放射状に拡大する双方的キンドレッド」(60ページ)としての「カバギャン (*kabagian*)」を基礎として、境界のあいまいなグラデーション状に広がる「圏」的構造を持った「近い親族関係にある者」、あるいは相互扶助が要求される「近しい関係にある者」としての「アワン・サブサバリ (*awan sabsabali*)」が指摘される。そのような集団範疇を基礎とする調査地の親族関係の特徴として、「親密な『圏』の範囲はあいまいであるがゆえに、誰が自分にとってのアワン・サブサバリであるかは、何らかの原則によって規定されるというよりは、日々の相互行為の蓄積の中でその都度判断されていくようなプロセスとして理解されなくてはならない」ことが論じられる。最後に、イロコス地方の人々の積極的な域外への移住が開始された19世紀前半以降の移住史が概観される。それによって、調査地S村からの移住史が、いかにマクロなイロコス地方全体の移住史を反映するものとなっているかが確認される。

第Ⅲ章「S村からイタリアへの移住」では、S村出身者のイタリアへの移住過程、そして移住後の生活において、彼らの親族関係がきわめて重要な役割を果たしていることが明らかにされる。まず、イタリアにおけるフィリピン人の概況が説明され、S村出身者を含めイタリアに移住したフィリピン人は家事労働者という特定職に集中する傾向があることが指摘される。そして、人々が親族関係を基礎に、イタリアと出身地村落とにまたがるネットワークを構築することによって、イタリアへの移住を拡大させてきた過程が明らかにされる。そのような親族関係を中心として形成された彼らのイタリアにおけるネットワークは、単に仕事を斡旋するだけでなく、外国人労働者として就労する彼らの労働条件をインフォーマルに調整・改善していく役割を果たしているという。また、親族ネットワークの政治経済的背景として、イタリアにおける移入民政策の導入の遅れおよび実施の不徹底という点が指摘され、そのような状況下において非合法入国を手配する代理店と親族ネッ

トワークが結びついた形で移住が拡大してきたこと、そしてそうした移住形態が彼らの親族ネットワークの強固な連帯を必要としてきたことが示される。

第IV章「村落社会の中のバリックバヤン」では、「外国帰り」を意味する「バリックバヤン (*balikbayan*)」という経済力や威信と結びついた地位範疇が、移住者たちの出身村落の人々の日常生活の中に、徐々に、そして確実に浸透してきている過程が明らかにされる。まずS村の世帯調査に基づき、海外からの年金や送金がS村における各世帯の経済的分化に顕著な影響を与えていることが指摘される。さらに海外移住者によってなされる送金以外の出身地村落の親族への様々な「支援」、具体的には、①家屋建設による雇用機会の創出、②農機具などの購入、③共有地の管理の調整、④国境を越えた地主－小作関係などが検討され、それによって海外移住の拡大による村落経済への影響を見る際に、送金という直接的な金銭の授受を見るだけでは不十分であることが示される。さらに、「バリックバヤン」たちの休暇中の出身村落での諸行為を取り上げることで、村落の一般住民とは異なる「バリックバヤン」という社会的範疇が強固に確立されていく過程や、「持つ親族」としての「バリックバヤン」と「持たざる親族」である村落住民との間に存在する緊張関係が描かれる。

第V章「故郷で養育される移住者の子どもたち」では、移住先へと拡大する家族・親族のネットワークの微視的な動態が、出身地の親族による移住者の子どもの養育という特定の状況に着目することで明らかにされる。移住者とその近親者は、夫婦での移住が一般的であり、かつイタリアでの子育てが困難である状況に対して、一方が送金を通して養育費用を負担し、他方が時に親族の手を借りながら日常的な養育に関わる責任を持つという形で、子どもの養育負担を近親者のネットワークの中に分散させることによって対処している。著者によれば、このような移住者の子どもたちの養育は、従来からの村落における近親者同士での養育慣行の延長上にある相互の助け合いであると考えられるが、一方でこのような移住者の子どもの養育をめぐる近親者間のトランスナショナルな協力関係は、送金の扱いをめぐる近親者間に緊張を生じさせる、あるいは対立を顕在化させる契機ともなりうる不安定な側面をも持つという。

第VI章「故郷で伝統的宴を主催する」では、海外移住者たちが故郷で宴を主催することが、海外移住者たちと村落在住者たちにとって、そしてトランスナショナルな社会的場の持続にとっていかなる意味を持ちうるかを論じている。まず調査地村落においてダヤ (*daya*) と呼ばれる伝統的宴の背景にある精霊信仰に関して述べられ、ダヤが宴の規模によって主催者の社会的地位を映し出すだけでなく、村落社会の人々の社会的地位の差異を再確認し、また作り出す機会ともなっていることが確認される。そして近年の海外移住の拡大とともに、ダヤの機会も拡大する傾向にある。そのようなダヤは、長期間にわたって故郷を留守にし、親族や隣人、友人との相互交流が困難であった移住者たちが、故郷の人々との関係を「近づける」、すなわち再構築することを可能にする文化的資源となっていると論じられる。同時にダヤは村落社会における新たな上層であるバリックバヤンによる顕示的消費として、彼らのアイデンティティ表明の機会でもあるという。このようなダヤは、海外移住者たちの社会的地位が評価される場として、そして移住経験が「適切に」

意味づけられる場としての故郷とのつながりを保持し続けることを可能にする機会として重要な意味を持つと論じられる。

第Ⅶ章「マニラに移住した村人たち」では、これまでのS村から海外への移住に関する議論を踏まえた上で、20世紀初頭以来、S村からの主要な移住先の1つであったマニラに住むS村出身者たちに焦点が当てられる。S村では、海外移住を可能にするだけの文化資本と経済資本を持たない農村出身者が、社会関係資本を援用して首都圏マニラの紙器産業に集中的に参入していたという。そして、マニラの紙器産業に就労する人々がS村在住者やイタリア移住者たちとの間に維持する社会的ネットワークの存在を指摘した上で、マニラに移住はしたが国内に留まり続ける彼らの生活世界も、イタリアへの海外移住と同様に、出身地を起点とするトランスナショナルな社会的場という文脈の中で理解される必要があることが論じられる。

結論「国境を越える村人と故郷」では、トランスナショナリズムの形成過程は、移住先社会の政治経済的諸条件によって構成される「受け入れの文脈」に注目しつつ、その個性が明らかにされねばならない点、トランスナショナルな社会的場の動態として、人々の間の緊張・葛藤を内包した相互行為や、社会的場自体の非同質的構成に十分に注意を払う必要があるという点、そしてトランスナショナリズムの持続という現象は、マクロレベルの構造的要因から生じる政治経済的不確実性への対応としての生活戦略という側面だけでなく、移住者にとっての故郷が持つ意味といった固有の文脈に埋め込まれた日常生活の中で捉える必要がある点などが本書の議論の要点として述べられる。そのうえで、民族誌的アプローチによって可能となるトランスナショナリズムの「文脈化」が、国際移住研究にとって必要になることが結論として示される。

以上のような内容を持つ本書は、従来グローバルな政治経済的構造や政策などのマクロな側面に注目しつつ議論されることの多かった国際労働力移動という現象を、移住者たちの日常の生活世界という微視的レベルに焦点を合わせることによって、トランスナショナルな社会的場が移住者の主観的経験に対して持つ意味を豊かに描写した民族誌であるといえよう。移住者たちの出身村であるイロコス地方のS村、ローマのアパートにおける移住者たちの「休日のコミュニティ」、そして首都圏マニラの紙器工場、それぞれの場における人々の相互行為、ふるまいや語りが生き生きと描き出され、それぞれの場の有機的な連関が理解されることにより、「多現場民族誌」の試みが見事に成功しているといえる。何よりもそのような厚みを持った民族誌の背景には、時にイロコスの農村でタバコの葉の乾燥作業を手伝い、時にローマのアパートで移住者とともに麻雀に打ち興じるという中で、著者と調査地の人々の間に構築された信頼関係があったのであろうと感じる。

さらに本書の特徴として指摘できる点は、その記述の対象である移住者たちが「誰であるのか」という、彼らの個性性にこだわる視点であろう。つまり、第Ⅱ章で指摘されるフィリピンのバリオ（村）とポブラシオン（町）それぞれの住民間に存在する社会経済的格差、緻密な農村調査によって示されるS村の世帯間の階層構造、イタリアへの移住者たちが有していた社会的文化的資本、これら移住者たちの属性の諸側面に関する分析により、彼らがフィリピン社会の社会経済的構成の中で占める具体的な位置が明らかにされる。そ

ここからは、しばしば「外国人労働者」、あるいは「フィリピン人移民・出稼ぎ労働者」という均質な集合を想定し、記述分析の対象としてきた従来の国際移住研究に対して、「誰について語っているのか」ということに関してより意識的にならねばならないという著者の主張が読み取れる。このように、移住者たちが社会化された出身地の地域社会の歴史的・社会的・文化的文脈と移住経験は分かちがたく結びついているという点を具体的な民族誌に基づいて明らかにしたことが本書の成果の1つであろう。

本書では、移住とその後の移住先での生活にとって親族を中心とした社会的ネットワークの果たす重要性が強調される。そこでは、世帯や親族間の相互扶助がもたらす統合的側面のみでなく、海外移住を契機として生じる微妙な緊張と葛藤が描かれている。本書の特徴は、そのようなミクロな生活世界の事例を、時間的・空間的によりマクロな文脈に位置づけ、両者の絡み合いの諸相を明らかにしている点である。まず本書では社会的ネットワークの活用を基盤とする移住者たちの生活戦略が、19世紀以降のイロコス地方からの移住という歴史的な文脈に位置づけられる。1970年代以降のS村からイタリアへの移住という現象は、歴史的に存在した「イロカノ・ムーブメント」の過程で村に蓄積された社会的・文化的そして経済的な資本に大きく影響されているということが理解できる。さらに本書では、S村からの移住とその後の移住先での生活が、移住先イタリアの移民政策や国内就業構造などのマクロな政治経済的文脈に位置づけられて論じられる。そこからは、移住者たちの柔軟な社会的ネットワークの活用のあり方が、いかに移住先国家の移民政策の変遷によって影響を受けているかが明らかになる。本書のこのような議論からは、歴史的、そして政治経済的な構造に規定されつつも、手持ちの社会文化的資本を活用しつつトランスナショナルな社会的場において自らの「生活の向上」を試みる移住者たちの社会的実践が克明に描き出されている。

このように従来の国際移住研究を補完する上で様々な示唆に富む本書であるが、最後に若干疑問を抱いた点を述べたい。既に指摘したように、本書の議論の主眼は、マクロな政治経済的構造と移住者の出身地社会において歴史的・文化的に形成された家族・親族関係の両者の絡み合いに注目しつつ、トランスナショナルな人の移動を論じるという点であろう。そして、そのような移住者の出身地社会の家族・親族関係の特徴は、第Ⅱ章で述べられているように、人々が各々の政治的・経済的利害関心に見合う形で流動的かつ選択的に親族関係を拡大させ、相互扶助規範が相対的に意識される近親者間の紐帯を維持しようとする一方で、状況に応じて様々な方法により親族の範囲を拡大させ、協力を求めることができる人々の範囲を広げている、というものであると考えられる。しかしこのような親族関係の特徴は、どの程度まで移住者の出身地社会、すなわちイロコス社会あるいはエスニック・グループとしてのイロカノに固有のものといえるのだろうか。調査地社会の親族関係の特徴として言及される「状況論理の強調」[Lewis 1971] や、「不確定性原理」[Kaut 1965] といった概念は、イロコス社会のみでなく広くフィリピンの低地キリスト教徒社会に共通するものであろう。さらにカーステンが論じるように、系譜関係を遡及的にたどることで親族組織を固定化し、非親族との境界を明確化するのではなく、むしろ状況に応じて親族の範囲は可変的に拡大され、新たな親族意識が創出されるという側面は、人々の移

動性の高い海域、東南アジアの双側の社会に共通する特徴でもある [Carsten 1995]。そのようなカーステンの議論を敷衍しつつフィリピンの南部タガログ地域からイタリアへの移住を論じた最近の民族誌においても、移住者の子どもの故郷における養育や、移住者による出身地での家屋新設などを事例としつつ、流動的・可変的な親族関係のあり様が論じられている [Aguilar 2009]。

このように、本書の指摘する親族関係の特徴は確かに移住者たちの出身地社会を含む東南アジアの双側の社会にて歴史的に形成されてきたものであることは確かだが、それがどの程度イロコス社会の固有性を示す要素になっているのかは明らかではない。そのようにグローバルな政治経済的構造と相互交渉を展開するローカルな社会の固有性が明確にならない場合、「トランスナショナルな社会的場の持続を、構造的要因だけでなく、固有の文脈に埋め込まれた日常生活の中で捉えていく」という本書の基本的な分析視点のフォーカスが若干ばやけてしまうことにもなるのではなかろうか。

以上のような疑問点はあるものの、本書がフィリピン研究のみでなくグローバル化の諸問題を扱う人類学的研究やその他の分野の国際移住研究にとって、大きな貢献となる成果であることに間違いはない。今後もますます拡大、深化するトランスナショナルな社会的場の複雑な動態を解きほぐす著者の仕事に期待したい。

参考文献

- Aguilar, Filomeno V. 2009 *Maalwang Buhay: Family, Overseas Migration, and Culture of Relatedness in Barangay Paraiso*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Carsten, Janet 1995 The Politics of Forgetting: Migration, Kinship and Memory on the Periphery of the Southeast Asian State. *Journal of Royal Anthropological Institute* 1(2):317-335.
- Kaut, Charles 1965 The Principle of Contingency in Tagalog Society. *Asian Studies* 3:1-15.
- Lewis, Henry T. 1971 *Ilocano Rice Farmers*. Honolulu: University of Hawaii Press.